

紹介

大化改新の研究

坂本太郎著

著者の學位請求論文との由である。この事は自ら本書に一定の價値を附與するものであるが、その評價尺度として、史學雜誌第四十八編第七號)に審査報告の所載があつて既に衆知の事柄であり、また他の場所においても多くの紹介批評のうちに著者の學殖識見に對する賞讃の辭が盡されてゐる。今此處に僅少の紙面を以て一應の讖辭を繰り返すは屋上屋を架するに似るであらう。然し本書の如き貴重なる文獻の出版を記録することは、それが幾度重複するとしても學界の責務として本書の内容一斑を紹介しておくのである。

本書の構成は〔緒論〕、〔改新の原因〕、〔改新の經過〕、〔改新の結果〕の四編より成る。〔緒論〕第一章研究の沿革においてまづ先學のなせる改新研究の業績を調べて大化改新理解の態度を吟味し、特に現代史學界における専門研究の三箇の立場として政治史的、文化史的、社會經濟史的の三史觀を擧げ、次で其等と傾向を異にする津田左右吉氏の方法を紹介してその展開の上に自己の立場を定めようとするのである。以て著者の學風を知るべきである

が、更にかゝる問題提出の仕方、先學の業績を吟味し、その所産の可と信ずるものを受けてその展開を意圖せるところに著者の眞摯なる學徒としての面目を見るべきであらう。かゝる事は一應何人も試みるころであるが、それを緒論の最初に掲げたことこの態度を意味あるものと見たい。かく先人の研究を採り、更にこれを進めようとする態度は本篇の各章を通じて看取されるものであるが、また序文において史學の立場を堅持するを念としたとの詞に、

史學の立場なる語の意義明瞭を缺くとしても、學問の系統の正しきと信ずるものを繼ぐとの自覺を示すものとも考へられて前者と相通ふ精神を見るのである。「第二章研究の範圍」において、改新の時間的範圍、研究の範圍を問題として次編以下の構成に照應せしめてゐるが、此處にも注意すべきは、最初に改新の概念を規定すべき時にありつゝ、かゝる概念が研究の過程に伴へるもの、叙述の便宜上の抽出にありとして強てかゝる抽象に従はず、後章の具體的論證のうちに讓れる態度である。定義成立が本論と時間的に相即の關係にあるに拘らず叙述の最初においてそれを記述する事は、一般通有の形式であり何人も怪まぬものであるが、事更この事を避けた點にも著者の學風として、史觀の樹立、新奇理法の適用を斥けて基礎的事實の検討を重んじたことのみからしむるところであり、かゝることが本書の編次をも決定するのであらう。

〔第三章研究の資料〕は日本書紀、古事記、古語拾遺、先代舊事本紀、風土記、大織冠傳六種古典の記事内容その他の考察であり、假名日本紀及和銅日本紀について、釋日本紀所引私記の撰進年代、

九州地方風土記補考の三篇を附載とする。普通附録ともすべきを斯く本篇に組み入れたことも著者の態度を示すであらう。以上を以て緒論を終る。

〔第一編改新の原因〕にはまづ我國内外情勢の行詰り、大陸文化の影響を探りあげて「第一章貴族擅權の弊害」を説き、その皇威をさせる諸現象をあげて社會經濟方面に及び、上代土地所有、人民支配の形態を中心に論を展開し、尙ほ朝鮮經營の沿革を取扱つてゐる。「第二章大陸文化の影響」においては主にその政治道德思想を明らかにし、き資料による我國に及ぼせる影響を推測すべき資とし、「第三章聖德太子の新政」において前二者相合して國政改革の必要を痛感せしめたもの、最初の具體化の事象を考へ、冠位十二階補遺を附載とする。「第四章改革の誘因」は社會情勢の變化により聖德太子の理想主義的なるものを越えて具體的政策の實施に到らしめた事柄を、遣唐使の歸朝、蘇我氏の横暴とその滅亡を中心として論じる。

〔第三編改新の經過〕は、「第一章準備及び端緒」として官職設置の事柄、及び大化元年中の數度の詔の吟味に入り、「第二章大綱の宣布」は専ら大化二年甲子朝の詔の逐條審議にあて、「第三章實施及び補遺」を設けて大化末年に至る諸事象を考察し、これまで編年的敘述に終始せる事について「第四章改新の概括」として、制度と實施との關係を考へることにより改新の歴史的具體的なる姿を見ようとする用意を拂ひ、次で改新の性質、目的を概括し、その精神を明らかにする。

〔第四編改新の結果〕に至つては、「第一章新制の變遷」について、(一)改新思想衰退の時代、(二)改新思想復活の時代、(三)新制發展の時代、の姿を宮殿造營、外國經營、律令制定等の綜合的觀察により明らかにせんとし、「第二章新制の確立」は専ら大賈律令を問題としてその内容に前代の改新精神の現れ方を指摘し、なほ條理制私見を附載とし、次に「第三章改新の影響」を説いては、皇威の隆昇、國家統制の鞏固、文化の發展と普及および官人有位者の跋扈、形式尊重等の事柄をあげ、次に改新を以て最初の王政復古とする見解を以て結んでゐる。

以上、たゞ目次の再叙にすぎぬ事を敢てなしたのは、著者が既に何人も問題とせるを取扱ふに當り何等新奇なる手法を採らざりし見解を多く示せる態度を明らかにし擧揚する意に外ならない。本書を一讀する事によつて、既に一般には考察の餘地なきまでに明らかであるかに思はれる大化改新時代の諸事象が如何に多くの問題を含み、その闡明の方法が残されてゐるかに氣附くであらう。例へば群山を遠望する人々にその山脈を明示することくである。著者が一般論の危険を警戒してゐる(一四二頁)ことも、かく摸糊たるものをそのままに置くを許さぬ精神に出づるであらう。之と共にまた問題の解決のためには乏しき資料をよく驅使する傍ら、「はずである」「に違ひない」「推察される」等の語を用ひて論旨を積極的に進めてゆくのであつて其處に問題とすべきものを残してはゐるが著者の精緻なる考證の上に立つものとして、人々を傾聽せ

しめる力をもつと思はれる。其等個々の問題についての論議は、著者の如き立場に立ち、著者の如き勞苦を重ねて後可能であらう。たゞ一般的紹介に終る所以である。

たゞ讀後の印象の一を附加したきは、何人も氣附く如く著者の執れる立場の限界についてである。政治史的以下の三史觀を擧げて之と對示するかの如く津田氏の方法を示してゐるが、この言辭を素樸に解釋するとき津田氏の態度を前三者と相容れ得ぬとする見解であるかに見える。捉はれた史觀を斥けることは云ふ迄もない、また歴史研究の正しきにおいて基礎的研究の缺くべからざるは自明の事柄である。問題はその上に立つ歴史理解の態度についてあり、著者が、社會事象の考察にあたり同時に關聯する他のものを取扱ふは勿論であるとするとき、また序において史家の立場の堅持といふとき、その方法についての説をも序において望ましいと思ふのである。(菊版本文六〇六頁、索引二六頁、昭和十三年六月、至文堂發行、定價五圓)(藤直幹)

國分寺の研究

角田文衛編

國分寺に關する論攷として從來公けにせられたものは其の數極めて多數に登るが、通じての傾向は文獻又は遺蹟の一方的なる探求に偏し、殊に遺蹟を主とするものにあつては各個の國分寺の個別的記述に終始して、汎く國分寺全般の立場からこれを考察するところは極めて尠かつた。文獻的研究に於いてはその缺陷を生じ

てはみないが、又一面に於いて單にその沿革の究明に主力を注ぎ組織、機能等の構造的な部門は殆んど顧みられなかつた。これは専ら遺蹟の全國散在、史料蒐集の煩雜に基くのであるが、今般京都帝大考古學研究室の角田文衛氏の編纂に依り、文獻遺蹟の國分寺の綜合的研究が企てられ、六十有餘氏の執筆に依つて彪然二冊の大著が公けにせられ、學界の久しきに亘る渴望が充たされたのは誠に慶賀に堪へない。

さて本書の體制は四編に分れてゐる。第一編は國分寺概觀と題し、設置、組織、衰頽の問題が、東大寺の草創、國府・國分寺關係の神社、國分寺の塔に關する論攷と共に取扱はれ、第二編は東大寺及び法華寺の研究として、東大寺の規模、その寺領、正倉院、三月堂、及び法華寺の沿革が建築史、經濟史、文學史、美術史等の立場からそれ／＼檢討されてゐる。第三編は國分寺各説であつて畿内七道の順に各國分寺の現状報告が掲げられ、第四編は餘論として奈良時代の建築・古瓦・隋唐の官寺を中心とする佛教政策に關する論文及び國分寺研究史が收められてゐる。更に最後に薩摩國分寺文書と獨文の概要が附載せられてゐる。圖版は極めて鮮明且潤澤に用ひられ、遺蹟の實際を手取るごとくならしめ、又多數の挿入カットは記述の理解を容易ならしめてゐる。以つて編者の意圖が奈邊に存したかを如實に知ることができ

る。八十幾編に上る論文は、その主とするところに従つて遺蹟又は文獻の徵證を多數且精緻に掲載してその論の由つて來るところを